

—物の見方、考え方—  
経営に生かす仏教哲学

青木伸雄

## 1. まえがき

仏陀、釈迦の教えを浅学菲才をかえりみず仏教大学で仏教学を学び、それが縁で学び続けているというだけで書き続けているが、最近の社会の現象、世相を観じるに何故、今、仏教なのか強く思うようになった。

現在の身のまわりをとりまく社会は、国内外を問わず不確実な時代となっている。

それは、あらゆる分野にみられる格差の拡大する格差社会に対する悲観論、楽観論の混在する先のみえない時代となったことだと思われる。

この社会全体の閉塞感が結果として、我意を張り他人のいうことに従わない、強情で我慢のない考え方の人間、いわゆる忍耐力のない人間が増えてきているような気がしてならない。

「他人くたばれ、我れ繁盛」の価値観である。これは、自分中心主義の汚職、談合、詐欺、嘘、偽り、隠蔽、不正等なんでもありの世の中を生んでしまった。

最近の老舗のトラブルは、先祖代々の業(なりあい)を守りつぐことをせず、先祖が長年かかって築いた信頼と信用を失う業(ごう)の世界、いわゆるその行為が悪業の結果を導きまねいたのである。

何故、「業病」を持つ考え方に変化したのか、悪因悪果、善因善果、結果として因果応報の教えが忘れられたのか？学び考えてみたい。

現代の情報化社会という時代の変化、流れを学び知らなかったことに起因するだけなんだろうか？

どんなに世の中が変化しても基本的に変らないことが存在する。仏教の深遠な英知ともいべき考え方について以下述べることにする。

「格差」がすべて悪い、これが結果として人間の不満

を生み、トラブルの要因だという人がある。

はたしてそうだろうか。仏教は格差の存在、いわゆる差別を認めている。

それは、人間は生まれながらにして格差があること、金持に生まれた者、貧乏人に生まれた者等が現実に存在することを認めている。誰れも親を選べない。

ただ、ここで重要なのは「釈迦の教えを学ぶ」ということは誰れでも平等にできると説いたのである。

何故、「学ぶのか」という問いに対して、知らないという無知は、結果として不幸をまねく。

人間、学ぶことによって、進歩、向上があるということ、学ぶことによって公共的な考え方、正義や道徳心が身につく協調する心が生まれる、私的には知識が身につく進歩、向上が生まれる。やはり先人達の物の見方、考え方として学びたいものである。

## 2. 知足とは

よく、お茶会にまねかれたときに茶庭の手水鉢等に「吾唯足知」の彫刻された文字をみかけることがある。これは、「吾ただ足ることを知る」ということで、これも仏陀、お釈迦さまの教えである。

仏教の教えでは、釈迦が臨終のときに説かれたという「仏遺教経」に述べられている。鳩摩羅什訳の「仏垂般涅槃略説教誡経」によると、

「若し、諸々の苦悩を脱せんと欲せば、まさに知足を觀ずべし。知足の法は、即ちこれ富樂安穩の処なり。知足の人は地上に臥すといえども、なお安樂なりとなす。不知足の者は天堂にあるといえども、また意にかなわず。不知足の者は富むといえども、而して貧し。知足の人は貧しいといえども、而して富めり。不知足の者は常に五欲のために牽かれて、知足の者のために憐憫せらる。これを知足と名づく」と仏弟子達に遺言されている。

この教えの中で、人間の欲望の五欲とは「財、色、食、名譽、睡眠」をさし、苦しみや悩みはすべて欲望によって生じるとしている。

だから、人生の生き方として「足ることを知る」という教えを示しているのである。

ただ、ここで問題なのは、あくまで「知足」とは「吾唯足知」ということであり、五欲に対して「足ることを知る」である。

現在流に説くとすれば、省エネルギー的考え方、物欲にとらわれない、ほどほどで妥協して現状に満足し、ぜいたくをさけて分にすぎたおごりを捨てることであると思われるし質素という言葉にも通じる。

人間社会で生活する上で、一般的にいう欲望がエネ

著者：広島大学生物生産学部講師  
元近畿大学産業理工学部客員教授  
日本禅画家協会名誉理事  
中国少林書画院名誉教授  
法号位 法印 禅画位 奥伝  
青木伸雄  
(野風生)  
雅号 樹泉